8/31 朝日

# 手足失った兵隊さんの記憶

農業　（香川県　59）

昭和30年代中頃、初詣で神社にお参りすると、手足を失った人たちが参道の脇に座り、白衣や軍服などを着て物乞いをするのを見かけた。子どもだった私はそれを見ると急に体がこわばり、通り過ぎるまで下を向いていた記憶がある。

戦争で傷ついた兵隊さんだと、後で親から知らされた。国の起こした戦争のために傷つき、国からの十全の保護を受けられず、人間としての尊厳まで傷つけられた人たちだった。

安全保障関連法案の報道で昔のことを思い出したが、憲法学者の「憲法違反」という声に耳を貸さず「学者と政治家の役割、責任は違う」などとうそぶく政治家がいる。政治家の高次な目的のためには憲法さえも問題ではなく、国民は何も考えずついてくればいいと言わんばかりである。

今、国民が家族の歴史や個人の記憶を通して求めているのは、「国の起こした戦争」による犠牲者を一人として出したくないという思いではないか。人々が死を恐れた戦時中の日々と、終戦の安堵に、いま一度思いを致すべきではないか。